

## 大学で進める教育のデジタル化の薦め

—小規模大学での実証：知識の共有・成果の可視化からAI活用まで—

小松川 浩\*1

### Toward Digitalized Education in Universities

—A Case Study at a Small-Scale University: From Knowledge Sharing and Outcome Visualization to the Use of AI—

Hiroshi KOMATSUGAWA\*1

In the post-COVID era, online education has become commonplace for both instructors and learners, and the rapid advances in generative AI provide high expectations for digital transformation (DX) in education. However, digital transformation of higher education has not necessarily progressed as expected. In particular, many universities are still struggling through trial and error to determine where to begin. In this paper, for universities facing such challenges, we present a case that has been validated across an entire institution over more than two decades—leveraging the agility unique to a small university—and, as one practical insight toward advancing digital education, we aim to offer an “introduction to digitization”.

キーワード：eラーニング，生成系AI，オンライン教育

#### 1. はじめに

高等教育改革の流れの中で、オンライン教育（eラーニング）による多様な学びの検討，eポートフォリオを通じた学修成果の可視化と質保証，またAIを活用した効率的で効果的な教育改革（DX教育の推進）が注目されている。本学会でも，大学の教育DX推進に積極的に関わる会員を中心に，コロナを契機に進んだ全学的オンライン授業の事例共有を図ってきた[1]。ポストコロナ時代を迎え，オンライン教育は教師および学習者双方で一般的になり，生成系AIの急速な進歩も教育DX推進への期待を高めている。しかし一方で，組織全体としての教育のDX化は必ずしも進展している状況とはいえ，特に昨今のデジタル化の潮流の中，どこから着手すればよいか試行錯誤の大学も多い。本稿では，そうした大学向けに，20年以上にわたって小規模大学ならではのスピード感で全学的に実証できた事例を紹介し，デジタル教育推進に向けた一知見として「デジタル化の薦め」を提供したい。

#### 2. 背景

筆者の所属する公立千歳科学技術大学は，平成10年に北海道千歳市に，公設民営の理工系単科大学（理工学部240名）として開学した。現在は公立化されたが，開学当初は地方の私学ということもあり，入学段階の多様な学力状況で如何に社会への質保証を行うかを，他大学に先駆けて意識することになった。また，大規模大学と変わらない設置基準上の大学運営に関わる制約から，効率的な人的運営も求められた。これはいまでいう教育のDX化に繋がる話である。こうした背景もあり，本学では，開学当初から，コンピュータでできることはコンピュータにという考え方は，一般の教職員含め，比較的受け入れやすい環境にあった。そうしたなか，(1) 高大連携によるリメディアル教育向けのeラーニングの取り組みに始まり，(2) 出口を見据えた全学的な能力養成を意識したICT活用教育の推進を経て，(3) ICT上に蓄積される学習状況の活用を通じた効果的な学習支援（AI活用）の試行に至っている。本稿では，これらを順に紹介していく。なお，本稿は，EduDX Reportに掲載した内容の転載が基本になっている[2]。

\*1 公立千歳科学技術大学 (Chitose Institute of Science and Technology)